

あとがき

「アーウーの大平」と呼ばれたところから、大平はしばしば、「弁舌の人」であるよりも、「文字の人」だと考えられてきました。たしかに大平は、読書を愛し、文章を書くのが好きでした。代議士当選一年後には、主として大蔵省奉職時代のことを記した文章をとりまとめ、『財政つれづれ草』という題名の小さな本を著し、さらにその一年後には、この本の内容を取捨選択し、代議士一年生の経験を綴った文章をつけ加えて、『素顔の代議士』と改題して上梓しました。

その後は、新聞・雑誌等に依頼された文章をまとめて『硯滴』と題する小文集を半年ごとに刊行するかたわら、これに掲載された文章のなかで残すに足ると思ったものを中心に『春風秋雨』『巨暮芥考』『風塵雜俎』などの単行本として刊行しました。また自民党幹事長時代には、『日本経済新聞』の求めに応じ、寸暇を割いて『私の履歴書』（全三〇回）を執筆しましたが、この英訳本、『BRUSH STROKES』は、のちに総理外遊の際の最もよき露払いの役を果たしました。

これらの本に、幹事長時代にある評論家との対談にもとづいて作られた『複合力の時代』、そして、その死後に総理時代の講演・演説・文章等を集めた『永遠の今』の二冊を加え

ば、大平の文集は全部で八冊になります。この文章量は、日本の政治家としては珍しく多い方にちがいありません。

また、大平の周辺には、その人柄を反映して、文章にかかわりある方々が多く集まりました。それらの方々の手によって、これまでに『大平正芳回想録』全三巻のほか、『大平正芳 人と思想』と『大平正芳 政治的遺産』が編纂されたことも、つけ加えておきたいと思います。

このように見てくると、「文字の人」という形容は、まさに大平正芳にぴったりだといふことができそうです。しかし、このたび大平裕常務理事の「これまでの刊行物に取り入れられていないものを集めて見てはどうか」という提案に従って、月刊・週刊雑誌や新聞、その他に載っている大平関連のものを集めてみたところ、必ずしもそうとは言いつれないことがわかりました。何よりもそれが予想を越えた分量であり、その多くが、対談、座談、インタビュー等の会話形式のものでした。そして、内容的には、書きものの場合にはその丹念な推敲過程で消えてしまうような生の表現が、かえってよくその人柄や考え方を伝えているようにも思われます。大平は、「文字の人」であっただけではなく、最後の衆参同日選挙の街頭演説のときにしめされたように、「弁舌の人」でもあったのではないでしようか。

「これまでの刊行物に取り入れられていないものを集める」という方針に立つての原稿の収集には、財団事務局の大平剛、野原寛、鈴木若男が当たりました。この三名が粗選びを行ったものを、『大平正芳回想録』編纂以来全面的に協力されてきた福島正光、阿部穆、

花岡浩の三氏と財団事務局の斎藤英夫が約三分の一に厳選して、合計七三編にまとめました。第一部に各界の方々との読みやすい対談を置き、第二部に埋もれていたエッセイを配し、第三部をやや硬い講演や論文に、第四部をジャーナリストによるインタビューに当て、第五部を大平語録で締めくくったのは、できるだけ多くの皆様に、再現された大平の肉声に触れていただきたいと願ったからにほかなりません。また、題字は大平が色紙に残された文字を使用し、装丁・造本には、前記花岡氏の協力を仰ぎました。

本書によつて、一六年前に死去されました大平総理が皆様の身近におられるように感じていただければ、関係者としては望外の幸せであります。

平成八年四月三〇日

大平正芳記念財団事務局